

Junior Red Cross

No.171

Information 2023

青少年赤十字指導情報



青少年赤十字創設100周年 活動報告

～未来のあなたへ、やさしさを。～



CONTENTS | Junior Red Cross Information 2023

PAGE

1	目次 / 青少年赤十字とは / 赤十字活動とSDGs	11	青少年赤十字創設 100周年記念 令和4年度国際交流事業をオンラインで開催！
2	巻頭言 なりゆきの未来から なりたい未来へ 日本赤十字社業務執行理事 事業局長 西島 秀一	13	青少年赤十字海外支援事業 (IYCP) スタディーツアー体験者の声 リーダーシップ・トレーニング・センター
3	人道／ウクライナの戦闘を踏まえ	15	日本縦断活動紹介
5	青少年赤十字創設 100周年オープニングイベント	17	教育現場で使える教材・資料
7	青少年赤十字創設 100周年特集 ・守山市で青少年赤十字創設 100周年セレモニーを開催(滋賀県支部) ・高校生ボランティア・アワード2022～持続可能な未来へ～(本社) ・Largest origami lei～最も大きなおりがみレイ～(広島県支部) ・郷土愛をはぐくむ「博愛みらいパス」を開催！(佐賀県支部) ・想いを「つなぐ」寄せ書き旗 ・青少年赤十字ポスターコンクールを実施！ ・つながるダンスプロジェクト ・創設100周年お祝いメッセージ		青少年赤十字の加盟・活用メリット/加盟状況



Junior Red Cross
Information 2023

2023.4.1 No.171
青少年赤十字指導情報



※本誌の内容は、原則として2023年3月31日時点のものです。

＜青少年赤十字 JRC (Junior Red Cross) とは＞

はじまり



子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙や包帯、被服、慰問品などを赤十字を通じて届けました。これがきっかけとなり、青少年赤十字 (JRC) が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟 (現在の国際赤十字・赤新月社連盟) は青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校 (現在の守山市立守山小学校) で「少年赤十字」として誕生しました。JRCはそれから脈々と活動を続け、2022年に100周年を迎えました。

JRCが大切にして
いること

青少年
赤十字の
実践目標

健康・安全

生命と健康を大切にす

奉仕

人間として社会のため、人のために
尽くす責任を自覚し、実行する

国際理解・親善

広く世界の青少年を知り、仲良く
助け合う精神を養う

気づき

身近な問題を発見する

考え

問題解決のための道筋や
方法を探る

実行する

活動に取り組み、評価と反省を
次へ活かす

青少年
赤十字の
態度目標

■ 持続可能な開発目標 (SDGs) とは？

「SDGs」(持続可能な開発目標)は、2015年9月の国連サミットにおいて採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された国際目標です。「地球上の誰一人として取り残さない」ことを理念とし、人類、地球およびそれらの繁栄のために設定された行動計画であり、17のゴールと169のターゲットで構成されています。

■ 赤十字活動とSDGs

国際社会全体の開発目標であるSDGsの策定には、国際赤十字も深く関与しており、赤十字では目標の達成にも貢献しています。そのため、今回の指導情報で取り上げる青少年赤十字活動において関連性の高い目標をそれぞれ掲載しました。



日本赤十字社は持続可能な開発目標 (SDGs) に貢献しています。

なりゆきの未来から なりたい未来へ

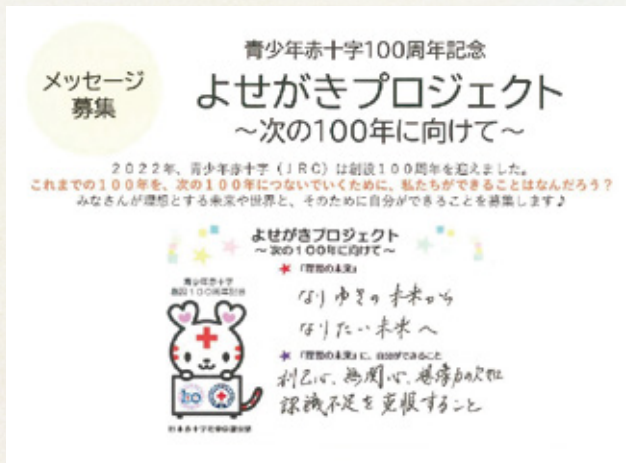
日本赤十字社業務執行理事
事業局長 西島 秀一



2022年、青少年赤十字は創設100周年を迎えました。5月5日に本社でオープニングイベントを開催したほか、全国の各支部では様々な事業を展開したところです。

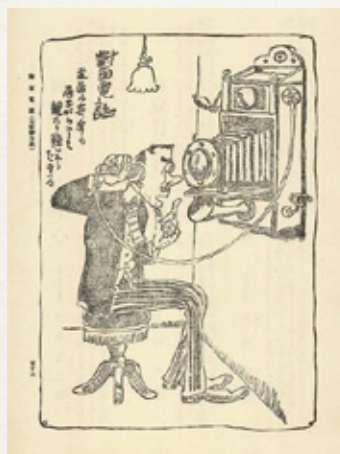
その中で東京都支部では、高校生メンバーの考案企画として「よせがきプロジェクト～次の100年に向けて～」と題し、これまでの100年を、次の100年につなげていくために、私たちができることはなんだろう？をテーマに多くの人たちにメッセージを募集しました。

私にもメッセージ投稿の依頼がありましたので次にように書いてみました。

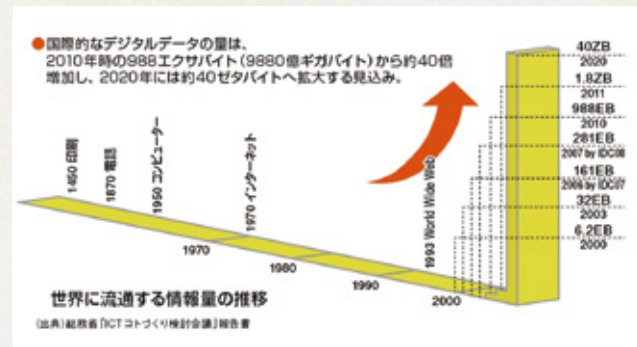


今から約100年前、1920(大正9)年4月に発行された『日本及日本人』という雑誌の春季増刊号では「百年後の日本」と題する特集を組み、2020年の日本の未来予想図について当時の学者、文学者、実業家、思想家などおよそ350人余の知識人たちから寄せられたアンケート回答と51枚のイラストを掲載しました。

その中の1枚『対面電話』には「芝居も寄席も居ながらにして観たり聴いたりできる」と紹介されており、ほぼ現在の『スマホ』に近い機能となっているのが注目されます。



それから100年、今や情報通信技術の進歩は著しく、世界に流通する情報量の推移、特に21世紀に入ってからデジタルデータ量は飛躍的に増大し目を見張るものがあります。



一方で、約20万年前にアフリカで生まれたとされてきた現生人類(ホモ・サピエンス)の脳容積は、誕生してこのかた増加していないといわれています。

現代の圧倒的な情報量が、人間の脳容積の限界値を超えて大洪水状態となっているといっても過言ではありません。この大量かつ一方通行の情報によって、私たちは物事を知ったつもりになり、表面的、薄っぺらな捉え方しかできなくなっている。物事の本質を捉えることが難しくなっているのではないか。これからの100年を考えた時に、さらなる情報通信技術が発達して情報が流される時、私たちはそれを咀嚼せず、簡単に鵜呑みにしてしまう恐れはないのか。誰かがうまく都合よく物事を運んで、それに便乗するだけ、極端に言えば、なるがまま、なりゆきの未来しか訪れないのではないかと危惧しています。

それよりは私たちは自身でよく考えて、なりたい未来、社会を創っていきたい。そのために自分ができることは「利己心、無関心、想像力の欠如と認識不足を克服することだ」と思うのです。

まずは手始めに未知なる世界へ旅をし、多様な人たちと対話してみてもいかがでしょうか？必ず新たな発見があります。コロナ禍によりこうした行動が制限されているのであれば、多くの古典・良書を読んでみることを是非若い世代にはお薦めしたいと思います。まだ知らない世界がそこには広がっていて、なりたい未来へのヒントを発見できるはずですよ。

人道 / ウクライナの戦闘を踏まえ

赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日代表部
広報統括官 眞壁 仁美



ICRC

赤十字国際委員会 (ICRC) は、主に紛争地で人道支援を行う赤十字機関です。中立、公平、独立を掲げて、戦争や武力紛争の犠牲となっている人々を保護・支援します。今から160年前の1863年にスイスで設立された、世界で最も古い国際人道支援組織です。2021年時点で、世界約100カ国に20,867人の職員を抱えます。一般の寄付によって人道的な活動をする日本赤十字社と異なり、ICRCの活動費は、戦争のルールを定めたジュネーヴ諸条約に加入している各国政府からの自発的な拠出金から成り立っていて、全体の9割以上を占めます。196カ国が加入しているジュネーヴ諸条約をはじめとした国際協

定や規約から正式な地位と人道的役割を与えられている唯一無二の組織で、国際人道法の守護者とも呼ばれています。



援助物資を携えてモスルに入るICRC(イラク、2017年)©ICRC

ICRCの具体的な活動

戦禍の人々に寄り添い、命と尊厳を守ることを使命とするICRCの活動は、多岐にわたります。生活の自立支援や食料・水・避難所の提供、離散家族の連絡回復・再会支援事業、戦争捕虜や被拘束者の訪問、戦傷外科やこころのケアなど、時には紛争の最前線で現場の人道ニーズに応えます。また、政府や反政府勢力、ゲリラ勢力などすべての紛争当事者と対話して、人々に不必要な苦しみが与えられないよう、戦時の決まりごとである国際人道法を説くのもICRC独特の活動です。戦時下の人たちが何を望み、どうしたら苦しみや悲しみ、痛みを取り除くことができるのか。すべての人が人間らしく生きられるよう、そして、尊厳のある人生を送れるようにするのがICRCの役割です。



民間人や医療従事者を巻き込まないよう、武装グループに国際人道法の原則を説くICRC職員(コロンビア、2014年)©GETTY IMAGES/ICRC



村が襲撃されて以来行方不明だった娘と、6年ぶりに歓喜の再会を果たす(コンゴ民主共和国、2017年)©ICRC

ウクライナでの活動

2014年以来、ウクライナは8年以上紛争状態にあり、地元のウクライナ赤十字社とともに、破壊された住宅やインフラの修繕、食料や衛生用品、医療物資の配付などを通して現地の人々に寄り添ってきました。2022年2月24日以降、ICRCは国内の活動拠点を6カ所から10カ所に増やし、職員も増員して喫緊の人道ニーズに対応。優先順位としては、命をつなぐため衣食住を提供し、毛布やマットレス、防寒具などの生活必需品やコロナ対策用に衛生用品なども配付しています。また、民間人を安全に避難させ、離散した家族のケアも実施。患者の搬送や国外の病院への移送、こころのケアなど精神面のサポートも行っています。さらに、人道的処遇と安否を把握するため、すべての捕虜への定期的訪問をICRCに認めるよう、紛争当事者に要請しています。



ロシア-ウクライナ紛争では当事者や国連と連携し、アゾフスターリ製鉄所を含めたマリウポリからの民間人避難を複数回実施(2022年5月)©ICRC



避難先へと旅立つ娘を見送る母親(ウクライナ東部、2017年)©ICRC

赤十字パートナーとの連携

赤十字の創始者アンリー・デュナンが唱えた「傷ついた人々を敵味方の区別なく救う」は、ICRC、国際赤十字・赤新月社連盟、そして192の各国赤十字社、赤新月社によって受け継がれています。ICRCの活動地では、現地の言語や土地勘、情勢や事情に長けている地元の赤十字社、赤新月社のスタッフやボランティアとの協働が欠かせません。たとえば、ロシアウクライナ紛争でいうと、ロシア赤十字社は主に避難者の支援を行っています。食料や衣服、衛生用品などの物資配付に加えて、財政面でも避難先の生活をサポート。また、こころのケアも実施していて、大人だけでなく、幼い子ども用に避難所の一角におもちゃやぬいぐるみを置いて、お遊戯をするスペースなども設けています。赤十字や赤新月のマークを身に着けるスタッフは、どの国であろうと、政治や戦争の局面とは全く関係のないところで人々に寄り添い、純粋に人道的立場から仕事をするように訓練されています。



シリア赤新月社と連携して、家畜用飼料を地元の畜産農家に提供(シリア、2021年) ©ICRC



ウクライナからの避難者にこころのケアを実施するロシア赤十字社。避難所にぬいぐるみや遊具を置いて、子どもが安心できる空間づくりも(ロシア南部、2022年) ©ロシア赤十字社

国際人道法の守護者としての活動

実際に武器を持って戦っていない人たち、たとえば一般市民や負傷兵、捕虜などはICRCの保護と支援の対象となります。そうした人々を巻き込む無差別兵器の使用は国際人道法に違反するため、原則やルールを守るよう紛争当事者に呼びかけます。ロシアウクライナ間の武力紛争でも、一貫して行っていることです。民間人はどこにいようと戦闘行為の影響から守られなければならないこと、そして、支援が必要な人々に援助を届けるためにICRCを含めた人道支援組織の活動が妨げられてはならないことを訴えています。事実上世界のすべての国がジュネーブ諸条約に加入していることから、戦争や紛争の当事者である国家は、自分たちがかつて交わした国際的な約束を守る義務があるのです。



ICRCには武器汚染を扱う部署も。住民が戦争の負の遺産に苦しめられないよう、地元赤新月社と知見を共有している(シリア、2022年) ©ICRC



子どもたちの学びを止めないことも大切。ICRC職員から文房具を受け取る少女(ウクライナ東部、2017年) ©ICRC

メッセージ

「私たちに何ができますか?」とよく聞かれますが、何ができるかを一緒に考える仲間を増やしていってもらえると嬉しいです。答えを与えてもらって、それが自分たちにできるかどうかを考えるのではなく、能動的に、自分たちだったら何ができるかを考えて、必要であれば追加の情報収集をして、できることから始めていってほしいと思います。SNSツールを使いこなしている皆さんの情報収集力や発信力、仲間を募る力に期待しています。「Sharing is Caring」=「共有することが思いやること」なので、仲間を募って自分が知ったことを共有し、広げていってもらえればと思います。



青少年赤十字 創設 100 周年 オープニングイベント

青少年赤十字(JRC)の
過去 >>>> 現在 >>>> 未来 >>>>



イベントの様様を
紹介します!

第一次世界大戦終結後の1920(大正9)年、赤十字社連盟は第1回総会で「すべての赤十字社は赤十字事業のためにその国の少年を養成すべし」と決議しました。1922(大正11)年には、赤十字加盟国に少年赤十字(現在の青少年赤十字)の結成を勧告。戦争のない世界の実現を、子どもたちに託そうとしたのです。同年5月5日、日本赤十字社は全国の支部に「少年赤十字ノ実施ニ関スル件通牒」を送り、「子どもたちの博愛の心を育み、健康の増進を図る」べく、青少年赤十字の結成を、現在の小学校高学年と中学校1・2年生にあたる尋常小学校に働きかけるよう促しました。それから100年後の2022年5月5日、創設100周年を記念し、「青少年赤十字創設100周年オープニングイベント」を実施。全国から450人の青少年赤十字中高生メンバーや指導者が参加しました。スローガンである「未来のあなたへ、やさしさを。」を掲げ、青少年赤十字を「過去・現在・未来」の3つの時間軸で構成されたこのイベントの様様を紹介します。



青少年赤十字創設 100 周年オープニングイベント

■ 活動宣言からスタート

青少年赤十字創設100周年オープニングイベントは、青少年赤十字メンバーを代表し、身延山高等学校3年生の岡田 結さんの活動宣言からスタートしました。



身延山高等学校3年生の岡田 結さんが活動宣言

宣言、私(わたくし)は、豊かな想像力と意志を持ち、他人の意見を受け入れ、人道の心をつなぎ、やさしい未来を創り、思いやりの輪を広げることをここに宣言します。

活動宣言

>>>> 過去パート 100年の歴史について理解を深める >>>>

第1部の過去パートでは、青少年赤十字の100年の歴史について日本赤十字社職員が紹介しました。

赤十字の創設とジュネーブ条約の始まりには、ソルフェリーノの戦いで負傷した兵士の救護活動を行ったスイス人のアンリー・デュナンの考え方があることに触れ、さらに世界では、青少年赤十字(当時は少年赤十字)が100年より前から始まっており、1914年にカナダやオーストラリア、アメリカの赤十字

社が軍隊を慰めるため、包帯や救護材料を送ったことが現在のJRC活動の始まりだったと解説しました。この活動は戦時に限らず継続すべきであるという意見が多数あり、1922年に現在の青少年赤十字が組織されたのです。また、宿泊研修であるリーダーシップ・トレーニング・センターの開催について、当時の写真を見せて何をしている様子なのか、質問を投げかけ、チャットを使ってクイズ形式で紹介しました。

■ JUNIOR RED CROSS 100th ANNIVERSARY



1922年当時の少年赤十字団旗



トレーニング・センター(1948年)



松韻福島高校 根本 裕之先生による講演



いわき市立菊田小学校 前校長 松本 光司先生

▶▶▶ 現在パート 「人道」「防災」などに取り組む現在の青少年赤十字 ▶▶▶

「JRC指導者が語る青少年赤十字の今」と題した第2部の現在パートでは、学校法人松韻学園福島高等学校の根本裕之先生が「人道」について語りました。根本先生は、今、ウクライナで起きている武力紛争などの状況を説明し、世界中でたくさんの紛争が起きており、赤十字はそれらの国で苦しむ人々を救う活動をしていること、また、紛争だけでなく、気候変動による干ばつ、洪水などの自然災害、貧困による劣悪な衛生状態などで苦しんでいる人がいることを紹介しました。根本先生はこのように語ります。

世界に目を向け、何が起きているのかを知ることの重要性

苦しんでいる人の存在に気づいてください。皆さんの中に人道の心、やさしさや思いやりの気持ちがあれば、やるべきことが見えてきます。世界に、日本に、身の回りに、いろいろな人がいて、いろいろなことが起きていることを知り、そこにいる人たちの苦しみを想像すること。それが、私たち赤十字、青少年赤十字の活動の原点なのです。

人道の心は、時代の変化で変わることはない人類普

遍の価値観です。人道の心のもと、苦しむ人の存在に気づき、相手の立場に立って自分にできることを考え、実行し続け、青少年赤十字は100年が経ちました。「気づき、考え、実行する」をこれからも、つなぎ、つづけ、つくことで、人道の輪を広げ、次の100年を目指していきましょう。皆さんの「やさしさ」や「思いやり」の心に基づいた行動に期待しています。

また、いわき市立菊田小学校 前校長の松本光司先生が、東日本大震災での経験をもとに、いのちの大切さや災害への備えなど「防災」について解説し、JRCメンバーに向けて「希望に満ちた皆さんの未来のために『防災』『減災』に備えましょう。たくさんの尊い命を守るために一緒に頑張りましょう」というメッセージを送りました。



赤十字の2021年の活動の説明を行う根本先生

▶▶▶ 未来パート 未来を築くJRCメンバーに向けて ▶▶▶

さらに第3部の未来パートでは、「スペシャルゲストによるエールとJRCのこれから」をテーマに、赤十字飛行隊福島支隊であり、エアレースのワールドチャンピオンとして活躍する室屋義秀さんがインタビュー映像を通じて、夢をもつことの大切さや社会貢献活動について語りました。室屋さんは、「時代の転換点である今、自分自身をよく理解し、未来に向かって何ができるのかを考えて行動することが大切」とJRCメンバーに向けてエールを送りました。

また、未来パートの後半では、JRC指導者の松尾一志先生とJRCメンバーの岡田結さんが、日ごろの活動や将来についてのトークセッションを行いました。

第4部の疑問質問解決コーナーでは、チャットで質問を募集し、登壇者が回答。質問者はこれまでの話題についてより深く理解する良い機会となりました。このイベントの様子は、青少年赤十字

全国指導者協議会公式インスタグラムなどSNSでも発信され、JRCメンバーだけでなく指導者や地域の方々に広く伝わりました。

また、イベントに参加したJRCメンバーや指導者から、「いつ起こるかわからない地震に対してハザードマップや避難経路の確認など、自分だけでなく家族や周りの人にも伝えて、大切な人の命を守れるようになりたい」「自分が何をしたいか、ではなく、相手が何をしてほしいか」の話が印象的だった」「青少年赤十字の『気づき・考え・実行する』を、身の回りのことから意識して生活したい」といった声が寄せられました。

青少年赤十字創設から100年の今、このように多くのJRCメンバーと指導者との間で目の前にある課題や取り組み方についての考えや情報が共有されたことで、新たにいくつもの取り組みが始まっています。



エアレースのワールドチャンピオンとして活躍する赤十字飛行隊員の室屋 義秀さん



松尾一志先生とJRCメンバーの岡田結さんの対談



インスタグラムなどSNSでJRC活動を発信



青少年赤十字創設100周年イベントに登壇したJRC指導者とメンバー



青少年赤十字 創設100周年 特集

青少年赤十字創設100周年を迎えた2022年、青少年赤十字加盟校や日本赤十字社の支部が中心となり、地域に根差した様々な活動が展開されています。全国で記念事業やイベントを「つなぐ」「つづける」「つくる」という切り口で「未来のあなたへ、やさしさを。」をテーマに実施しました。その活動事例を紹介します。

■ 守山市で青少年赤十字創設100周年セレモニーを開催

滋賀県支部

1922年5月5日、滋賀県野洲郡守山尋常高等小学校(現在の守山市立守山小学校)で、国内で最初の少年赤十字(現在の青少年赤十字)が誕生し100年の節目を迎えたことを記念して、日本赤十字社滋賀県支部と滋賀県青少年赤十字指導者協議会は7月29日、守山市民ホールで「青少年赤十字創設100周年記念 滋賀県青少年赤十字大会」を開催しました。

功労表彰では、守山小学校及び滋賀県青少年赤十字指導者協議会の田中滋規会長(守山小学校長)へ、日本赤十字社の清家篤社長が表彰状を授与しました。また、実践活動報告では、守山小学校JRC委員による活動報告や甲賀市立甲南第三小学校の寺川絵理教諭、福岡赤十字病院の川口真由美看護師がそれぞれ発表したほか、元プロ卓

球選手の水谷隼さんが特別講演を行いました。

これまでの活動の映像をスクリーンに映し、500名以上の参加者が青少年赤十字のあゆみを振り返るなど、青少年赤十字創設100周年を祝う有意義なセレモニーとなりました。



高校生ボランティア・アワード2022 ～持続可能な未来へ～

青少年赤十字創設100周年が特別応援

本社

奉仕活動を実践する高校生の発表・交流を目的として、風に立つライオン基金が主催するイベント「高校生ボランティア・アワード2022～持続可能な未来へ～」が8月16・17日に東京都内で行われました。青少年赤十字は創設100周年を記念し、「特別応援」という形で参加しました。本イベントでは全体シンポジウム、ブース発表大会と表彰式が行われ、144の団体が参加しました。

青少年赤十字加盟校の多くが地域で開催された予選大会を通過し、全国大会に出場しました。ここではいくつかの活動内容を紹介いたします。



2016年よりスタートし今回7回目を迎える高校生ボランティア・アワード2022



▶ 栃木県立鹿沼東高等学校 JRC 部

栃木県立鹿沼東高等学校 JRC 部は、特別支援学校との交流や障がいのある子どもの放課後デイサービスでの学習支援を行っています。共生社会の実現が求められる中、「障がい者やジェンダー差別に対して私たちにできることは何か？」を考え、こうした活動を始めました。今後の目標としては、活動を自分たちの中だけで完結させることなく、多くの人たちに活動を伝え、周囲を巻き込んで活動の幅を広げていきます。



栃木県立鹿沼東高等学校 JRC 部のメンバー

▶ 福井県立大野高等学校 JRC「結」

福井県立大野高等学校 JRC「結」は、ボランティア活動やSDGs達成のための活動を実施しています。2021年にサークルとしてJRC「結」を設立し、「すべての子どもに水と教育を」をスローガンに掲げ、ユニセフと協働し1キロ走ると東ティモールの水設備に10円が寄付されるシステムである「名水マラソンボランティア&ランナー」に参加しました。その他、オンライン防災学習、ハロウィン×オレンジリボン、災害義援金の募金活動もあります。これからも地域のため、世界のために貢献できる取り組みを続けていきます。



福井県立大野高等学校 JRC「結」のメンバー

祝！青少年赤十字創設100周年賞受賞！！

千葉県立四街道高等学校 JRC 同好会

青少年赤十字創設100周年賞を受賞した千葉県立四街道高等学校 JRC 同好会のメンバーに、受賞の感想を伺いました。

- Q：受賞、おめでとうございます。今の気持ちをお聞かせください。
 A：ありがとうございます。『うれしい』の一言に尽きます。
 Q：普段はどのような活動をされているのでしょうか。
 A：私たち四街道高校 JRC 同好会は、コロナ禍での『こころの交流を大切にしたいボランティア』の継続を可能にする非接触型ボランティアを行っています。以前行っていた特別支援学校や介護老人福祉施設への訪問活動が難しくなり、自分たちに何ができるかを話し合い、この活動を始めました。
 Q：非接触型のボランティアということですが具体的にはどのような内容なのですか？
 A：地元の駅である JR 四街道駅の駅長と連携し、同駅に掲示スペースを作りました。季節感のあるメッセージカードや掲示物を作成し掲示することにより、乗降客との心の交流ができるようにしました。

- Q：今後の活動について聞かせてください。
 A：受賞をきっかけに僕たちの活動が広く理解されるようになると嬉しいです。そして「こころの交流」の輪を学校内だけでなく学校のある地域、さらにその外側に広げていくことで地域全体が優しい場所になり、より住みやすい環境に変わっていくことを目指し、これからも活動を続けていきます。



千葉県立四街道高等学校 JRC 同好会のメンバー

■ Largest origami lei ~最も大きなおりがみレイ~

広島県支部



を「つなぎ」、参加者それぞれが自分にできる活動を「つづける」ことの大切さや意義を感じていただいたと思っています。

■ 力を合わせることで成せること

ギネス世界記録挑戦は、プロジェクト参加者が個々に活動しているのではなく、ひとつの目的のために繋がっていることを証明する場として企画しました。おりづるを繋ぐことを通じて、人と人、想いをつなぐ、大切な意味をもった挑戦でした。

■ 次の100年に青少年赤十字の心を繋げていきたい

日本赤十字社広島県支部は2022年1月、100万羽おりづるプロジェクトをスタートしました。このプロジェクトは、青少年赤十字誕生の歴史を振り返り、100年の区切りに相応しく、また、次の100年に青少年赤十字 (JRC) の心を繋げていきたいという願いを込めて実施するものです。加盟・未加盟に関わらず、県内すべての小・中・高等学校へ向けて、JRCの心に触れていただく機会として参加を呼びかけました。「おりがみ・おりづる」は、広島の人々に馴染みのものであり、それらを使うことで多くの児童・生徒たちの参加が期待されます。

9月22日から24日の3日間、広島県立総合体育館武道場を挑戦会場として、延べ450人へのぼるボランティアの方々が参加しました。このボランティア活動にも200人を超える JRC メンバーが参加しました。

2日間の連結作業を終え、ギネス公式参加認定員による審査を受け、ひとつに繋がれたおりづるの長さは15,579.7m (使用したおりづる約58万羽) となり、これによって「Largest origami lei ~最も大きなおりがみレイ~」として世界記録の認定となりました。

参加者はこの挑戦を通じて、「ひとりではできないことでも多くの人が力を合わせることで成せることがある」ということを体感できました。

9月26日からおりづるの解体が始まり、広島の子供たちから海外の子どもたちへのメッセージを裏面に印字した「おりづる再生ノート」として生まれ変わります。このノートは、2023年2月頃に支部職員がネパール連邦民主共和国の子どもたちに手渡しで届ける予定になっています (2022年12月現在)。

また、今回ノートの制作を請け負った団体と連携して、おりづる再生ハガキの制作体験を支部事業の中で展開していきます。このプロジェクトはこれから人道・平和教育へと繋がり、受け継がれていきます。

広島県・市町教育委員会等の協力を得て、県内すべての学校に参加の呼びかけが行えましたことに大変感謝しています。

広島県支部から呼びかけ、県内312校 (園)、約11万人の児童・生徒が集まりました。そのうち、未加盟校は127校にのぼります。さらに、赤十字サポーターをはじめ39の企業・団体からの参加を含めると約12万人が参加したことになります。これは企画当初の想定を遥かに上回る反響であり、プロジェクトの目的に賛同していただいた企業・団体の力添えもあり、より一層意義の深まる企画になりました。

結果として、参加者が力を合わせて120万羽を超えるおりづるを「つくり」、ギネス世界記録挑戦によって参加した人々とその想い



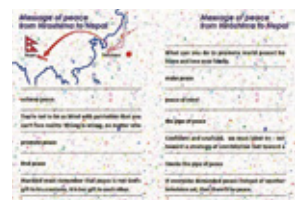
ギネス世界記録の公式認定証



延べ450人のボランティアが参加



想いをつなぐ、おりづる



完成したおりづる再生ノート



郷土愛をはぐくむ「博愛みらいバス」を開催！

2022年は日本赤十字社の創設者である佐野常民生誕200年、そして青少年赤十字(JRC)が創設100周年を迎える年です。それを記念し、佐賀県支部では“佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館”をめぐる「博愛みらいバス」を開催しました。

この事業は、佐賀県内のJRCメンバーを対象に実施するバスツアーで、郷土の偉人である常民の生涯や功績に触れ、人を思いやる博愛のこころと郷土を愛するこころをより一層はぐくむことを目

的としています。参加者からは、「常民がこんなにすごい人だと知らなかった」「常民は優しい心を持った人だと改めて思った」などの感想が寄せられました。

また、毎年開催している“青少年赤十字加盟校校長等研修会”では、100周年記念展示のほか、JRC指導者や元JRCメンバーであり現青年赤十字奉仕団員を講師に招き、「つなぐ」「つづける」「つくる」をテーマにリレートークを実施し、JRCの魅力や学校教育への取り入れ方についてお話しいただきました。



想いを「つなぐ」 寄せ書き旗

青少年赤十字創設100周年の取り組みは「つなぐ」「つづける」「つくる」という3つの切り口から全国各地で展開しています。青少年赤十字メンバーや指導者等の想いを「つなぐ」取り組みとして寄せ書き旗に想いやメッセージを寄せました。その取り組みを紹介します。



岩手県支部



秋田県支部



埼玉県支部



岐阜県支部



京都府支部



鹿児島県支部



沖縄県支部

創設100周年 お祝いメッセージ

さまざまな分野で活躍されている著名人、アスリートやミュージシャンの方々からお祝いのメッセージをいただきました。

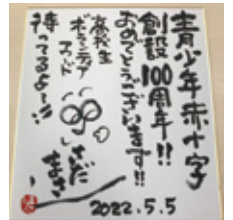


TERUさん
(ミュージシャン・GLAYメンバー)

GLAYのTERUです。この度は青少年赤十字創設100周年おめでとうございます。100周年記念のダンス企画に僕が作詞・作曲した「YOUR SONG feat. MISIA」を起用して頂けるという事でありがとうございます。是非この楽曲に合わせてダンスを楽しんでもらいたいです。「つながる」ダンスプロジェクトという事で皆さんが踊った動画を是非SNSに投稿してみてください！青少年赤十字創設100周年の告知にも僕が作った「Thank you for your love」を起用頂いているのでこちらの動画もYouTubeにアップされているので是非みてください。



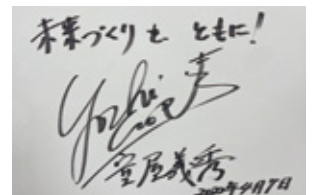
さだ まさしさん(ミュージシャン)



水谷 隼さん(元プロ卓球選手)



(c)LEXUS PATHFINDER AIR RACING
Yusuke Kashiwazaki

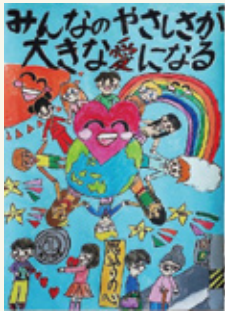


室屋 義秀さん(エアレースパイロット、赤十字飛行隊)

青少年赤十字 ポスターコンクールを実施！

いくつかの支部では、青少年赤十字創設100周年を記念し、ポスターコンクールの作品募集を行いました。ここでは、岩手県支部、秋田県支部、三重県支部、兵庫県支部の最優秀賞受賞作品を紹介します。

〔最優秀賞〕



岩手県滝沢市立鶴飼小学校 4年
三浦 怜歩さん

〔最優秀賞〕



秋田県大仙市立大曲南中学校 1年
古谷 美結さん

〔最優秀賞〕



三重県松阪市立徳和小学校 6年
浅井 四葉さん

〔最優秀賞〕



兵庫県立洲本実業高等学校 2年
柴田 知歩さん

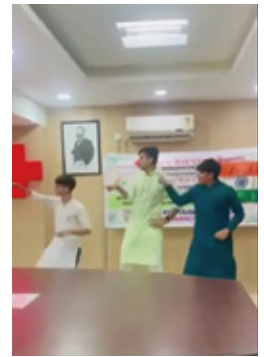
つながるダンスプロジェクト

青少年赤十字創設100周年を記念し、2022年6月から始まった「つながるダンスプロジェクト」。夢の途中の若者を応援するGLAYのテーマソング「YOUR SONG feat. MISIA」の歌詞に込められた思い、多様性や社会的包摂等について理解を深め、青少年赤十字創設100周年のテーマである「未来のあなたへ、やさしさを。」について、前向きに進むこと、相手を思いやることを目的に実施しました。

このプロジェクトでは日本国内と世界の赤十字姉妹社の青少年赤十字メンバーがダンスを通じて、つながることができました。また、エントリーされた動画は1つの動画に集約し、日本赤十字社ホームページなどに掲載しています。

完成動画は
こちらから

100周年特別サイト



インド赤十字社ユースメンバー



ミャンマー赤十字社ユースメンバー



埼玉県青少年赤十字メンバー



奈良県青少年赤十字メンバー



アルメニア赤十字社ユースメンバー



有森 裕子さん(元マラソンランナー)
スペシャルオリンピックス日本理事長

青少年赤十字創設100周年、おめでとうございます。スペシャルオリンピックスは、スポーツを通して知的に障害のある人たちの社会参加を応援している国際的なスポーツ組織です。今回、スペシャルオリンピックス日本の公式応援ソングである「YOUR SONG feat. MISIA」が、青少年赤十字創設100周年を記念したダンスプロジェクトでも活用されるのを大変うれしく思っています。この楽曲はGLAYのTERUさんが、スペシャルオリンピックスのアスリートやご家族、コーチの皆さんに向けたメッセージを込めて作ってくださったものです。この曲とダンスを通して、青少年赤十字の皆さんの心が一つになることを楽しみにしています。障害のある人もない人も、ともに生きていける社会を、世界中の青少年赤十字の皆さんと一緒に目指していけたらと思います。



山崎 康晃さん
(プロ野球選手)

横浜DeNAベイスターズの山崎康晃です。青少年赤十字創設100周年、おめでとうございます。僕は、中学生の頃からプロ野球選手になるという夢を持っていました。その時期、JRC活動を通じて多くのことを学び、苦しいことがあっても頑張ることができました。今、子どもたちと交流しているときなどに、当時の自分を思い浮かべることがあります。皆さんも夢に向かって頑張ってください。みんな、がんばれ！！



渡部 陽一さん
(戦場カメラマン)

こんにちは。戦場カメラマンの渡部陽一です。青少年赤十字創設100周年おめでとうございます。世界は大きく情勢が動いていますけど、民族や宗教、領土、様々な資源、そうしたものが全てノーボーダーになればいいと思います。繋がる連帯の力、継続の力というもの、やさしさや寛容につながっていくと思います。これからも、世界のたくさんの声をどうか支えていってください。創設100周年あらためておめでとうございます。

第2部



文化紹介。国や地域で有名な食べ物、伝統衣装等を紹介し合う(画面はパレスチナ赤新月社のプレゼンテーション)



日本赤十字社がルワンダで実施する事業について、現地に派遣されている職員が紹介



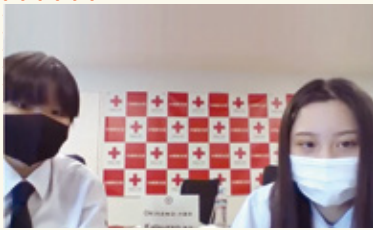
赤十字気候センターのサネ・ホゲステガー氏による講演



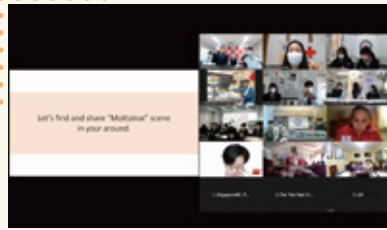
青少年赤十字メンバーが取り組む気候変動の事例として、福島県立平工業高等学校のメンバーが活動報告。学校でのCO₂排出量2%削減を目標として掲げ、福島県知事と議定書を取り交わし、主体的に省エネ・省資源化に取り組みました。結果、目標の5倍以上である11.5%のCO₂排出量の削減を実現しました。



気候変動に関する議論が活発に行われたHR



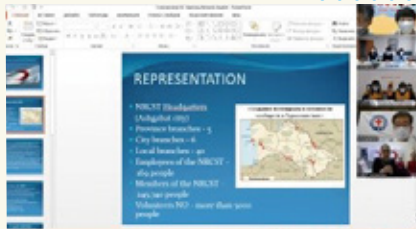
沖縄県JRCメンバーによる発表



赤十字語学奉仕団主催 交流プログラム



ウガンダ赤十字社メンバーのダンス



トルクメニスタン赤新月社メンバーによる発表



ミャンマー赤十字社メンバーによる文化紹介

指導スタッフ

指導スタッフ

赤十字語学奉仕団

赤十字語学奉仕団



島根県立隠岐島前高等学校 竹田 育子さん
国際交流事業の参加は7度目ですがオンライン参加は初めてでした。災害が起きたとき、被災地の人の気持ちになれるかどうかという意識が大切だと私は考えています。今回担当したグループでも、メンバー同士が積極的に交流を図り、気候変動に対してアクション起こそうという気持ちが見受けられました。この国際交流はそうした点とても意義深いものだと思います。



愛知県立岡崎高等学校 塚元 雅則さん
平成30年度の指導者講習会に初参加しました。今回感じたのは、メンバーの成長が大変早いということです。気候変動について話し合う場でさまざまな方法を考えることはもちろん、効果についても考えるべきという意見に感じました。国際交流事業は、視野を広げる良い機会なので、参加を迷っている人がいたら、参加しないのもつたいないと伝えたいですね。



椎名 優馬さん

赤十字語学奉仕団としての参加は5度目です。参加者全員が一つになって企画を作り上げるところにやりがいを感じます。赤十字ユース・ボランティアメンバーが一堂に集う貴重な機会なので、参加してコミュニケーションをとるなかで学ぶことがたくさんあります。生涯を通じて貴重な人生経験となる有意義な事業なので、ぜひ多くの人たちに参加してほしいです。

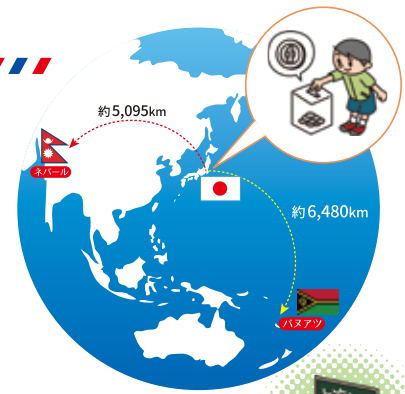


井上 三規子さん

国際交流事業に興味があり初参加しました。参加して感じたのは、若いうちに色々な国の人と交流を持つことの重要性です。多様性を知ることで視野が広がるので、たとえ英語がわからなくてもいい経験になるはず。また、生徒達を支える活動に興味のある方は、語学以外にもサポートできることがたくさんありますので、気軽に参加していただきたいです。

青少年赤十字海外支援事業 (IYCP)

「青少年赤十字海外支援事業 (International Youth Cooperation Project (IYCP))」は、日本の青少年赤十字メンバーの奉仕の精神を醸成して、対象国の赤十字社・赤新月社の子どもの健康・安全の確保を図り、国際理解・親善を推進することを目的としています。ネパールとバヌアツを対象に、2017年から支援を行っています。ここでは、これまでの事業を報告するとともに、2019年に行ったバヌアツへのスタディーツアー体験者の声を紹介します。



ネパール 持続可能な「水と衛生」事業



ネパールでは全国で衛生環境が悪化し、手洗い場の減少、感染症の流行が確認されてます。子どもたちが衛生的な行動を身につける知識と技術を得られるよう、ネパール赤十字社と協力し、学校での衛生関連の授業や家庭における衛生啓発活動などを実施しています。



支援対象地域の家庭訪問を通じた衛生環境の啓発活動



バヌアツ 災害に備える防災教育事業



地震や津波、洪水、火山噴火など自然災害が多発するバヌアツですが、教育機関の防災教育が不十分で、生徒は防災や対応方法の知識を持たない状況です。防災意識の向上を目標に、支援校や教員への防災教育、救急セットの配備を進めています。



支援対象地域の小学校に防災研修を実施

スタディーツアー体験者の声 視野が広がったバヌアツスタディーツアーでの体験



埼玉県青少年赤十字卒業生奉仕団 (大学2年生) 荒木 菜那さん

■ スタディーツアーに応募したきっかけ

私は高校時代、国際文化交流部に所属し、漠然と外国に行きたいと思っていました。青少年赤十字 (JRC) の行事や委員会へ参加していたこともあり、2年生の時に顧問の先生から青少年赤十字スタディーツアーの案内が来ていると声をかけられました。派遣先がバヌアツ共和国と聞き、全く知らない国なので一瞬ためらいましたが、応募することにしました。実は同じ時期にオーストラリアへの1週間の留学の募集があり、興味があったのですが資金的な面もあって見送ろうとしていたのです。この機会を逃してはいけない、自分にとって良いきっかけになるはずと感じて参加を決めたのです。

■ 問題を掘り下げて考え、語り合う新鮮な体験

スタディーツアーへの参加はとても刺激的で楽しいものでした。特に印象深いのは、1日の終わりに参加メンバーとJRCのスタッフの方で行うミーティングです。自分の知らないことや気づけなかったことを他のメンバーの発言から理解し、逆に私が気づいたことを話すという意見交換を通して、問題と対策について全員で真剣に考えました。

例えば、ある村で津波を想定した避難訓練がありました。日本ならば高所へ避難しますが、ここには高い場所も高い建物もありません。皆で2〜3キロメートル先へ避難するだけです。ガラ

スの破片などのゴミが落ちていた砂利道を、ビーチサンダルをはいた村の人たちが走るためこちらが心配になります。ミーティングでこのことを話すと、ゴミ拾いをするのはどうかという意見が出ました。しかし、どうやって村の人に呼びかけ、参加してもらうかという疑問を別のメンバーが口にします。また、避難場所まで走りきる体力のない子どもや高齢者はどうするのかという別の問題も提起され、対策を考える……。議論は自然と熱を帯び、気づくと3時間を超えていたということもありました。このように1つの問題について深く掘り下げ、答えを突き詰めていくプロセスが新鮮でした。

■ バヌアツをもっと知ってもらうために

今後やりたいことは、スタディーツアーで得た学びをより多くの人に知ってもらうことです。バヌアツの人は日本のことをよく知っていました。しかし、私も含め日本人の多くはバヌアツを知らないのが現状です。まずはバヌアツを知ってもらい、そのうえで支援したいという気持ちになってもらう、このことを目標に行動していきたいと思います。

私は、スタディーツアーに参加して視野が広がり、価値観が変わりました。JRCメンバーの皆さんも、やりたいことがあったら少しずつでも行動を積み重ね、回ってきたチャンスを逃さないようにしてほしいと伝えたいです。



バヌアツの生徒と交流



ホームステイでお世話になったホストファミリー



常にメモをとりふり返しを行う



津波を想定した避難訓練

リーダーシップ・トレーニング・センター

青少年赤十字活動として行う会議や研修は、全国で対面やオンラインで実施しています。
2022年度に対面で実施したリーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)の様態を紹介します。

高知県支部 **小学生対象** **中学生対象** **高校生対象**

小・中・高等学校青少年赤十字 夏期リーダーシップ・トレーニング・センター



高知県支部主催のリーダーシップ・トレーニング・センターは新型コロナウイルス感染症の影響により、3年ぶりの宿泊を伴うトレセンの開催となりました。開催に向けて指導者協議会長や指導スタッフと協議し、本来の2泊3日の日程、集合型による開催の意義をあらためて確認しました。感染対策の徹底に加え、参加者全員に開催10日前からの健康チェック、集合時と解散前には、参加者全員に抗原検査を実施することで安全な開催に配慮しました。

本県のトレセンの良さは小学生から高校生のみんなで協力しながら「気づき」「考え」「実行する」力を養えることです。グループワーク、貿易ゲーム、フィールドワークなどの活動には、協調性・積極性を引き出すために指導スタッフの熱い思いがいたるところに込められています。

「行動するのは恥ずかしいことではないということを学校の人に伝えたい」「たくさんの人たちと意見を交換することで良い案が出てみんなで楽しく行動できた」など、大きく成長したメンバーの姿が見ることができ、トレセンは青少年赤十字活動の柱であると強く感じました。



山梨県支部 **中学生対象**

令和4年度 青少年赤十字リーダー養成トレーニング・センター

山梨県支部では2022年8月2日、3年ぶりにリーダーシップ・トレーニング・センターを開催しました。事前の担当者会議ではコロナ禍で気をつけることの共通理解を図り、当日は複数校が集まるので「三密」の回避を徹底しました。開校式は、距離を置きパーテーションを設置したうえで行いました。アイスブレイクは大声を出さず、工夫したクイズ形式で互いに和むことができました。

午前は本社から講師を招き、ジュネーブ条約や国際人道法について話してもらい、理解を深めました。午後は野外でのフィールドワークを予定していましたが、熱中症防止のため愛宕山少年自然の家室内で行いました。

各校ごとの取り組みを3つの実践目標に分けて行ったワークショップでは、参加メンバーから、「赤十字の歴史、意義を学ぶことができた」、「テーマについて班で話し合い、考えを深められた」といった声を聞くことができました。指導スタッフの創意と工夫により、本行事が開催できましたことを心から感謝申し上げます。



福島県高等学校青少年赤十字指導者協議会 **高校生対象**

福島県高校リーダーシップ・トレーニング・センター

2019年は中止、2021年はリモートでの開催で、対面による開催は、3年ぶりとなりました。指導スタッフの工夫により、すべてのプログラムにおいてメンバー自らが気づく仕掛けが随所に見られました。また、コロナ禍での実施のため、フィールドワークでは「絵伝令」のような非言語活動が中心となり、「闇夜の国」では長い棒をメンバー間に挟むことで距離を確保するなど配慮しました。「プログラムはハードだったがすごく成長できた」「学校では学べないことが多く学べた」といった感想が多く見受けられ、トレセンでの学びがメンバーの心と体にしっかり根付いたことが伝わり、改めてトレセンは対面による開催が重要であると実感しました。



日本縦断活動紹介

全国の青少年赤十字(JRC)加盟校の中から、最新の取り組みをご紹介します。JRCを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育てている6つの取り組みをヒントに、日ごろのJRC活動や学校生活をますます充実させていきましょう。

各ブロックの取り組み



● 日本赤十字社宮城県支部 組織振興課(宮城県) 担当者 星 和敏さん

テーマ 「JRCオンライン語り部LIVE」による未来の命を救う情報発信



東日本大震災から10年となった令和2年以来、平時から災害への備えを子ども達に考えてもらうため、公益社団法人3.11メモリアルネットワークと協働し、「JRCオンライン語り部LIVE」を実施しています。語り部が資料等を提示しながら、地震と津波被害の体験を話します。子ども達が自分事として受け止め、未来の自分と周りの命を救う行動に結びつけられることを願い、配信しています。

2年間で約161校、15,000名以上の子ども達と先生が視聴しています。「話に臨場感があり、子ども達は自分事として捉えている」「実際に地震があったとき、家族に避難行動を促した子がいた」との声が先生方から寄せられました。また、子どもの振り返りでは、「いつか災害が起きる」ではなく「今災害が起きたら」が大切だと思った」「自分で考えてすぐ避難して自分の命を自分で守りた

いと思った」と行動に結びつく意見が出ました。

この取り組みを通して「気づき・考え・実行する」という態度目標が、災害から命を守るために、さらに子ども達に定着することを期待しています。



▲全国に向けて配信



アクションカードに学んだことや行動したいことを書きながら、振り返りを行う

● 神奈川県青少年赤十字 横須賀地区指導者協議会(神奈川県) JRC指導者 野元 浩子さん

テーマ 青少年赤十字創設100周年を機に次の100年を考える取り組み「next100」



普段はそれぞれの学校で青少年赤十字活動を行っています。各学校から数名のメンバーが役員として集い、青少年赤十字連絡協議会として学校間の交流をしています。

コロナ禍での交流も制限され、思うように活動が出来なくなりましたが、「next100」の企画への参加を通して、地元の企業・プロバスケットボールチーム・赤十字ボランティアの皆さんと環境について考えたりビーチクリーンを体験しながら、未来に向けて共に諸問題に取り組む大切さを学ぶことができました。

その経験を活かし、3年ぶりに開催したメンバーシップ・トレーニング・センターでは「next100未来のあなたへ優しさを」をテーマに防災学習を行いました。避難所設営や段ボールトイレ等生活必需品の製作、また謎解きゲームで防災の知識を学び、今も100

年後も起こり得る自然災害に対して、共助の気持ちで防災意識を高める機会になりました。

※next100:より良い100年後の未来を共創したいという想いを持った企業・団体・個人がパートナーシップを通じてSDGsの実現と社会課題に取り組むプロジェクト。この度「青少年赤十字創設100周年応援企画」として、未来を創る青少年と共に気候変動などに取り組む通年プログラムが企画されました。



ビーチクリーン:地元の企業・プロバスケットボールチーム・赤十字ボランティアの皆さんと共に ©Mari Harada



メンバーシップ・トレーニング・センター:学校間交流で防災知識を学び、共助の気持ちを高め合う

● 石川県立金沢錦丘高等学校 JRC部(石川県) 担当者 JRC部顧問 三浦 薫さん

テーマ ウクライナ人道危機で苦しむ人々を支援する募金活動



本校のJRC部では今年度ウクライナ募金に取り組みました。きっかけは3年生の生徒達が2022年の春から毎日報道されるウクライナ人道危機で苦しむ人々に対して自分たちに何かできないかという思いからでした。単に募金箱を校内に設置するだけではなく、遠く離れたウクライナについて全校生徒に理解してもらってから募金をしてほしいという思いから、生徒達はウクライナの歴史や文化について調べ、校内に掲示しました。普段はおとなしい生徒たちが自分たちから積極的に取り組んでいて、驚きました。それほどウクライナの現状について心を痛めていたのかもしれま

せん。朝の登校時にも積極的に募金を呼びかけていました。

この募金活動を通して生徒達はひと回り大きく成長したように思います。今後もいろいろな活動を通して「気づき・考え・実行する」ことのできる生徒達が育ってほしいと思います。



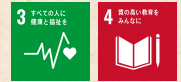
独自のポスターを作り行った募金活動



ウクライナの歴史や文化について校内に掲示したポスター

● 京都市立金閣小学校(京都府) 担当者 校長 奥野 利一さん

小学校



テーマ 新型コロナに負けない心と体を！

新型コロナウイルスが世間を騒がせ始めてから3年目を迎えています。未だ終息の気配はなく「withコロナ」を視野に入れた取り組みが進んでいます。

そのような中、未知のウイルスが引き起こす病気からくる不安や差別という負の連鎖を断ち切るために「げんきなこころとげんきなからだ」という絵本の読み聞かせ授業を、日本赤十字社京都府支部の赤十字奉仕団支部指導講師の宮本さんにお越しいただき実施しました。「不安な気持ちや心配な気持ちは、誰かをせめたって、誰かを仲間外れにしたってなくなる」2年生の子どもたちは絵本の内容にしっかり耳を傾け、まずは自分の身のまわりの、そし

て世界中の人たちが仲良くなれることに思いを馳せていました。



赤十字奉仕団支部指導講師の宮本さんが講師 積極的に発言する児童

● 明星幼稚園(山口県) 担当者 園長 藤永 恭子さん

幼稚園



テーマ 楽しく主体的に学ぶ防災

昨年JRCに加盟したことをきっかけに、初めて避難訓練前に「ぼうさいまちがいさがしきけんはっけん」を使用しました。子どもたちはイラストを通して、教室と似た環境で地震が起こることを想像し、実際にはどこが危なくて、何が頭上から落ちてくる危険性があるか、視覚的に理解できたようです。

今年は先生方により良くこの教材を使ってもらいたいと考え、日赤県支部を通じて講師の派遣を依頼しました。赤十字ユース委員の中村さんは、「どこが危ない?」「どうしてそう思うの?」と対話中心に進め、子どもたちの自主性や、積極的に学ぶ姿勢を上手く引き出されました。何より子どもたちが楽しく学んでいる様子

が嬉しかったです。この教材を取り入れたことで、子どもたちが自分の身は自分で守れるようになることを期待しています。



赤十字ユース委員 中村 美宥さんが講師 園長先生と園児と一緒に防災を学ぶ

● 沖縄県青少年赤十字高校協議会(沖縄県) 担当者 森岡 蓮花さん

中学校
高等学校

テーマ オンライン防災ワークショップ

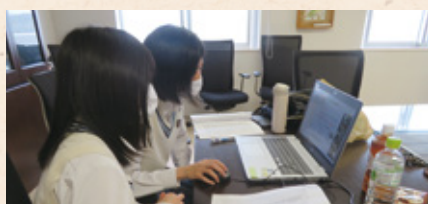
私たちは、令和4年3月26日にオンライン防災ワークショップを行いました。これは、沖縄県青少年赤十字高校協議会役員が中心となり毎年開催していた、中学・高校春季トレーニング・センターが新型コロナウイルスの影響により現地開催できなかったため、それを代替したイベントです。

主に防災についての講話やワークショップを行いました。例えば、沖縄県での地震や津波の危険性について、また、手話やハイゼックスの使い方や、災害が起こった際に外国人が理解しやすい優しい日本語を考えたり、避難先でのこころのケアや健康支援についての講話を行いました。

JRC加盟校の中学生や高校生が参加し、様々な意見交換をしな

がら今後の学校や私生活でできることについて深く考えました。普段関わることのない他校の生徒と交流して刺激を貰えたことが大きな収穫であり、貴重な学びの場となりました。

オンライン防災ワークショップの内容は、沖縄県青少年赤十字高校協議会役員の方々の皆でやりたいことや学びたいことを考えて準備しました。大変ではありましたが、参加者アンケートでは好評だったことがとても嬉しく、達成感がありました。今回の学びが1人でも多くの人々の命を守ることに繋がれば良いなと思っています。



高校協議会が運営



オンラインで手話講座

教育現場で使える教材・資料

青少年赤十字(JRC)では、児童・生徒への指導の際に活用できる教材を多数作成しています。今回は青少年赤十字の担当職員が、実際の教育現場で役立つ教材を紹介します。
※詳細は二次元バーコードよりご利用いただけます。

小・中学校

日本赤十字社本社の「おススメ！」 学研 まんがでよくわかるシリーズ189 青少年赤十字のひみつ



「まんがでよくわかるシリーズ・まんがひみつ文庫」は子どもたちが疑問に思っていることや、知りたいことをまんがで分かりやすく説明・紹介する書籍です。この度、青少年赤十字創設100周年を記念し、『青少年赤十字のひみつ』を作成しました。同シリーズの書籍は、全国の小学校の図書室や公立図書館・児童館などに寄贈されます。



赤十字の成り立ちや、赤十字及び青少年赤十字が大切にしていることがこの1冊に集約されています。是非、ご一読ください。

ワンポイント

幼/保
小学校

日本赤十字社東京都支部の「おススメ！」 ハートラちゃんといっしょ！ 「赤十字」と「青少年赤十字」



青少年赤十字創設100周年を記念し、各園・校内でより手軽に、日頃から赤十字・青少年赤十字に親しみをもってもらう、理解を深めてもらうことを目的に作成しました。ハートラちゃんと一緒に、赤十字の成り立ちや態度目標、実践目標について8分という短い時間のアニメーションで学ぶことができます。



指導者向けには「活用の手引き」もあります。登録式をはじめとした様々な機会でも、ぜひご活用ください！

ワンポイント

小学校

日本赤十字社宮城県支部の「おススメ！」 仙台89ERS 防災ハンドブック まもるいのち ひろめるぼうさい



宮城県支部では、パートナーシップ協定を締結している地元の人気プロバスケットボールチーム「仙台89ERS」の協力により、選手の写真が随所に登場する小学校低学年でも防災に興味を持ってもらえるような防災ハンドブックを作成しました。



本教材は「まもるいのち ひろめるぼうさい」を学校だけでなく地域や家庭でも活用できるようにアレンジし、問題と答えだけでなく解説をつけて、防災を楽しく学べる教材となっています。

ワンポイント

幼/保
小学校

日本赤十字社新潟県支部の「おススメ！」 赤十字防災かるた



昔ながらの遊びを通じて、防災・減災について学ぶことができます。絵札・読み札・かるたケースがそれぞれ台紙になっており、ミシン目に沿って取り外し、完成させるタイプになっています。



友達やおうちの人と遊びながら、防災・減災について学ぶことができます。読み札の漢字にはフリガナがふってあり、裏面には解説文がついています。ジャンボかるた(A3判)もあります。

ワンポイント

中学校
高校

日本赤十字社茨城県支部の「おススメ！」 スライド・動画教材「SDGsと青少年赤十字」



SDGsとは何かを理解し、青少年赤十字活動の中でSDGsを意識してもらうために作成した動画とパワーポイントスライドの教材です。



何か特別なことを始めるのではなく、これまで実践してきた、日々のJRC活動の中にSDGsを見出してもらいたいという観点から教材を作成しました。スライド資料は自由に加工して使えます。

ワンポイント

小・中
高校

日本赤十字社大阪府支部の「おススメ！」 世界の様子から考える「平和」ってなんだろう？



この冊子は、世界に「地雷」「児童労働」「難民・避難民」といった現状があることを知り、「平和とは何か」を考えてもらう内容となっています。大阪日赤有会会の創設50周年記念事業として、府内の青少年赤十字加盟校で国際理解・平和学習を実施する際のテキストとして2020年4月に作成されたものです。



「平和」のために今の私たちができることを考える一冊です。

ワンポイント

小学校

日本赤十字社愛知県支部の**おすすめ!**
ぼうさいボードゲーム いえまですごろく



「もし外出中、大地震に遭ったら？」発災後、子どもたちが家族のもとへ安全にたどり着くまでに起こり得ることを、ゲームを通じて楽しみながら学ぶことができる教材です。愛知県支部が地元企業と協働して開発しました。



学校の授業1時限で、ゲームから振り返りまで行うことができます。防災学習のヒントとなるキーワードがちりばめられており、実施後の更なる学習につながります。また、話し合いや協力のトレーニングにも最適です。

幼・保
小・中・高校

日本赤十字社三重県支部の**おすすめ!**
手洗いチェッカー



日赤三重県支部有功会より、「手洗いチェッカー」を寄贈いただきました。県内加盟校や地域奉仕団の希望者に対して無料貸し出しや出前授業などで活用しています。出前授業では、「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!」「きもちよくいきるために」などと合わせて、正しい手洗いの仕方を学んでいます。手洗いチェッカーは、専用のローションを手のひら・甲に塗り手を洗います。そしてチェッカー(ブラックライト)に照らし、洗い残しを確認することができます。



手首や指の間、爪などによく洗い残しが多いので、その箇所を意識して手洗いをするよう衛生指導をしています。

青少年赤十字の
加盟・活用のメリット



赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

JRCの活動は、子どもたちの思考力(気づき)・判断力(考え)・表現力(実行する)を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

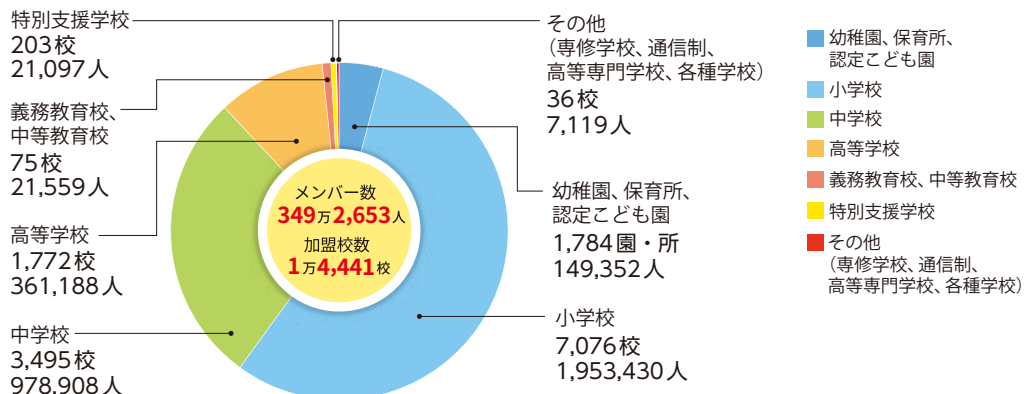
赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

加盟校数 **1万4,441校**

メンバー数 **349万2,653人**

加盟校数・メンバー数ともに令和4年3月末現在

青少年赤十字の
加盟校数・メンバー数
(令和4年3月末現在)



※この3年間で約9万人増加しています。

青少年赤十字指導情報 No.171

Junior Red Cross Information 2023



※この指導情報は株式会社ゆで太郎システム
による「ゆで太郎夢基金」からのご寄付の一部が
充てられています。

日本赤十字社 東京都港区芝大門1丁目1番3号

TEL. 03-3437-7083 FAX. 03-3432-5507 <https://www.jrc.or.jp/>